

まえがき

高層気象台長 定村 努

高層気象台の設立は、航空機利用の拡大に応える形で企画された。しかし、その意義は、高層気象観測を気象学の一分野として確立したことであった。大気の状態を立体的に把握することは今日の気象学にとって非常に重要な手段となっており、数値予報の基礎的な資料として欠かせないものとなっている。高層気象台は、大正9年に設立され、大正12年に彙報第1号、大正15年に第2号が発行されている。この第2号で「風速度の季節的变化（略）冬は地面で2.9m/sの風速であつても三百米の高さでは急に増して5.7m/sに達する。けれども五百米以上一軒位までは其の増加率が小さい。それより以上は増加率再び大となり海拔十軒にては風速70m/sを超ゆるに至る。（略）」と記述されている。このように高層気象台彙報は世界的にも先進的な知見や技術を世に広め、後世に伝えるために発行されてきたもので、高層気象台の性格を他の気象台に対して特に際立たせている。彙報ではそのほかにも気球の大きさと上昇速度や破裂高度との関係、無線測器の実験結果など、後の高層気象観測の運用に重要な論文、報告を数々発表してきた。

諸先輩のように、自分で課題を見つけ、研究、開発を行い、論文、報告に纏めて発表する作業は、入学試験のように答えを用意されている問題を解くのと異なり、結果(正解の存在)に対する不安と戦いながら進める必要がある。失敗を恐れるあまり、ゲームの攻略法を本やインターネットなどで簡単に得てきた現在の若者が最も苦手とする事である。であるからこそ、高層気象台職員には果敢に課題に挑戦し、失敗を恐れず、結果に対する不安と戦いながら、研究、開発に取り組み、これを纏めて世に問う仕事を継続していただきたい。

原稿を読んでいて感じることもある。私たちは技術者であると同時に文章を書いているということである。研究の成果を世の中の人に知ってもらい、理解してもらうために纏めるという作業を行うのだから、ほんの少し言葉を選べば、誤解されることもなく、続きを読みたくなる文章に出来るのではないかと残念に思うことがある。詩人や小説家ではないので、その点に必要以上に労力を懸ける必要はないが、技術者であることに甘えず、努力できるのではないか、このことが研究の仕上げの作業なのではないかと思うのである。

今回は、技術報告7編が投稿された。高層気象台が所掌する観測業務にかかる課題がそれぞれの対象となっている。今回纏められた報告以外にも継続している調査、研究がある。これらの論文や報告が、高層気象観測技術の今後の進展に大いに貢献していくことを期待する。